

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：34603

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12862

研究課題名(和文) アメリカの大衆音楽聴取者による文学的価値の外在化行動に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Externalizing Behavior by the Audience of American Popular Music

研究代表者

石崎 一樹 (ISHIZAKI, Kazuki)

奈良大学・教養部・教授

研究者番号：70330751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：1970年代に出現したパンクロックにしばしばその源流が求められ、アメリカ特有の音楽ジャンルと化した「インディーロック」における文学的価値の表出について分析を加えることが本研究の目的である。具体的な方法としては、アメリカで開催されるインディーロック・アクトが多く出演する音楽フェスティバルに会場する聴取者の教養への志向についての聞き取り調査を行い、そのサンプルを分析した。結果、音楽に端を発する「インディー」的価値が普遍性を獲得するに至っていることが理解できたため、これを現代の日本の文化的表出の、教育界・産業界における取扱いの参照項目とされたい。

研究成果の概要(英文)：The goal of this research was to look at the uniquely American music genre called "indie rock" and to analyze the present situation where musical and lyrical representations associated and involved with "literary" values can be observed there. With the life-world-oriented perspective in mind, and collecting samples from the audience, I conducted inquiry researches at some music festival venues held mostly in the United States, in order to understand how the audience are oriented to intellectuality and literary values that are exuded by certain "indie rock" music acts playing at the venues. Analyzing collected samples has brought a conclusion that the "cool" indie values or attitudes that originated from the American popular music have now acquired universality in American society in general, which can be, especially in terms of industrial and educational aspects, a beneficial reference also in the Japanese society when we look at our cultural representations.

研究分野：アメリカ文学・文化、英語教育

キーワード：教養 ロックフェス インディー 音楽産業 知的財産 文化資本 ゲーミフィケーション

1. 研究開始当初の背景

本研究は、いずれも科学研究費（挑戦的萌芽研究）により行った、平成 21 年から 22 年の「アメリカの大衆音楽と教養—『リット・ロック』における文学性の研究」と、24 年から 26 年の「アメリカの大衆音楽と創作におけるソーシャルメディアの役割」の成果を発展的に追求する側面をもつ。これらの研究では、大衆音楽における「教養」が極めて有効に機能していることが理解されると同時に、それまでの「何を読むべきか」ではなく「なぜ、そしていかに読み、書くべきか」という方法論（James D. Bloom, *The Literary Bent*, 1997）が創作に対するアプローチ選択の可能性を飛躍的に高めたことが理解され、これを文学的価値の再評価の契機としてとらえた。

こうした創作アプローチの変質は、文学と大衆音楽のジャンル間相克のダイナミズムを端的に表すアーティストの出現を促しており、その代表的な例として、現在のポピュラー音楽の見取り図の中ではすでにジャンルと化した「インディーロック」に属する One Ring Zero, The Decemberists, Vampire Weekend, Titus Andronicus, Arcade Fire らを同定した（石崎「音楽で文学を表現すること—One Ring Zero の例から」）。

実際 2011 年には、このうちのアーケイド・ファイアがアメリカで最有力の音楽業界賞であるグラミー賞の最高賞を受賞した。また Death Cab for Cutie など複数のアーティストがビルボードチャートにも度々現れるなか、音楽視聴者によるインディーロックの需要の現状についての調査と考察は、ポピュラー音楽における文学的価値のあり方を理解する方法として妥当であると考えたことが、ポピュラー音楽聴取者による文学的価値の外在化行動に関する研究」とする本研究開始の背景である。

2. 研究の目的

創作へのアプローチの変質は、当然ながらメディア環境が変革期を迎え、芸術ジャンルが大きく変質している現状を反映するものでもある。こうしたなかで、アメリカのポピュラー音楽に、これまでにはない規模で顕在化する文学的想像力の実状と方法論を追究することが本研究の目的であった。今日的意味でのインディーロックは、かつて反体制の象徴だったパンク・ロックの系譜にあるが、歴史化とジェントリフィケーションのプロセスを経た現在、このジャンルの多くのアーティストが教養への志向性を持つ。加えて、彼らの作品が優れたロック音楽として標準化し、若者の知識欲を満たすツールとして機能している状況も見られる（Ryan Hibbett, 'What Is Indie Rock?', 2005; Matthew Bannister, "Loaded": indie guitar rock,

canonism, white masculinities', 2006）。つまり、教養主義はすでにロックの規定要件のひとつであり、そのなかでも文学的価値が重要な要件となっているのである。さらに、この状況は従来の意味でのインディー的小規模活動に留まらず、大手音楽会社の商品や情報の流通規模が反映される事態に至っている。本研究は、影響力のある他の芸術ジャンルにおける文学的価値の可視的実状を積極的に検証する。

調査の対象は、アメリカで開催されるロック・フェスティバル参加者のうち、インディーロックを主な目的とするオーディエンスである。金銭・労力面で敷居の高いフェスに参加し、複数のステージから好みのアーティストを選択的に選んで観るという、強い動機に基づく彼らの行動は、このジャンルの音楽聴取者が持つ文学的教養についての外在化行動とみなすことができる。そこで、参加者の教養や文学に対する考えについて意見聴取し、これを計量的・実証的なデータとして分析しつつ、同時に理論構築を行う。これにより現代ポピュラー文化における教養や文学的想像力をめぐる現状の捉え直しを行い、将来の社会制度設計に具体的にフィードバックできる形で、文学的価値の再構築を目指した。

3. 研究の方法

大衆音楽のなかでも特にインディーロック聴取者が持つ教養や文学に対する意識の外在化行動を調査し、この結果を受けて、若者への影響力の強いロック音楽に顕在化する文学的教養の要素が、実際に聴取者にはどのように受け止められているのかを把握し、文学以外の芸術ジャンルに顕在化する文学的価値を捉え直すための理論化の作業を行った。実作者と聴衆の多くに大学生を中心とする若者が含まれるため、「教育」に関する議論も念頭に置きつつ、インディーロックというアメリカ独特の大衆音楽ジャンルに文学的教養と想像力が顕在化している現状の調査と検証を行った。具体的には、ロック・フェス参加者への文学を中心とする教養への志向についての聞き取り調査を実施し、これを検証することで、現代社会に見合った文学的価値の再確認と再構築を目指した。

4. 研究成果

一貫して行ったのは、インディーロックアクトが出演する、主にアメリカで開催される音楽フェスティバルにおける聞き取り調査である。同時に、その結果に基づく分析と理論化の作業を行った。分析については、最終年度に予定していた計画の一部が気象事情により実現せず、本研究最終年度終了間際ま

で調査自体がずれ込んだことなどから一部未了となっているが、調査そのものは終了し、最終的な分析を現在進めている。

理論化の成果の一部として、「クールなインディー—アメリカのポピュラー音楽の現在」(大阪教育図書)を執筆した。これは、アメリカのポピュラー音楽における「インディー」という言葉の意義を H.D.ソローの思想に見出しつつ、現代の音楽産業の構造やアメリカの社会を読み解く手がかりとするためである。また音楽の実作者からの意見聴取を継続的に進める目的で、インディー音楽家の多くも参加し、現在2億人のリスナーを有するドイツのベルリンに拠点を置く音楽情報共有サイトにページを設置し、調査と分析のサンプルの活用役に役立つため、現在整備を行っている。

平成 27 年度の活動としては、10 月、テキサス州オースティンで開催された音楽フェスティバルである Austin City Limits (ACL) の観客への聞き取り調査を行った。観客が自らの志向に沿って観覧するステージを積極的に選択するため、現場会場での聞き取り調査により、どのようなジャンルの音楽をどのような志向を持つオーディエンスが観覧するのかについての参考データが得られる。本年度については、研究協力者(ムーアワークス(株)代表取締役斎藤悠哉氏)の助力を得て、39名のオーディエンスへの聞き取り調査を行い、インディーロック志向のオーディエンスの知的志向性が顕著であることが実証的に理解されるサンプルを得た。

また3月には、北米のインディーロック実作者に対する聞き取りとして、日本ツアーを行ったカナダのインディーロック・バンドである Rah Rah と The Elwins のメンバーへの取材を行った。特に The Elwins で作品制作の中心的な役割を果たしている Feurd 氏から、彼らの活動の実態について見解を聴取した。Rah Rah はバンクーバーオリンピック時のイベントに出演する実力派、The Elwins は現在 mtvU (MTV の大学生向け特設チャンネル) で注目されるなど気鋭のバンドで、いずれもカナダ政府の補助金を受けて日本ツアーを行っている。また、彼らのマネージメントを行う Dave Spencer 氏から、カナダのポピュラー音楽産業の実態についても意見を聴取した。

これと並行し、インディーミュージック・サイト「INDIENATIVE」主宰者からは、今後の研究対象として日本のインディーシーンの調査も視野に入れていることから、日本の音楽フェスティバルでの取材協力、またインディー音楽のサイト運営における協力関係などについても意見交換した。

平成 28 年度。7 月にニューヨーク州ランドールズアイランドパークで開催された Panorama Music Festival での、45 名への

調査を株式会社 Some Echoes の A&R 担当吉武健氏の協力を得て行うと同時に、業界関係者への聞き取り取材として、アメリカで有数のインディーズレーベルであるポリバイナル・レコードの NY 支部長 Mark Kenny 氏へのインタビューを行い、アメリカのインディー音楽をめぐる現状や日本のステークホルダーとの関係などについて話を聞いた。

またこの年度では、アメリカ合衆国の音楽フェスティバルでの聞き取り調査を2度にわたって行うことを予定していたため、7月のニューヨーク州での調査に続き、前年度も調査を行ったテキサス州オースティンの Austin City Limits で、音楽フェスティバルの聴衆の属性や嗜好を分析するため聞き取り調査を実施した。

本研究の当初計画では取材する音楽フェスティバルについて、可能な限り異なる場所での取材を予定していたが、日本から渡航可能な時期にかかわる制約から、取材が可能なフェスティバルが一定程度限定されることが理解された。一方で、一定の取材地での経年での定点観測を行うことによる利点があることから、この利点を活かすような研究成果を導く方向性を確認し、ACL への取材を行うこととした。

また、インディー音楽家の実作者との連携作業として、アメリカ合衆国オハイオ州出身のインディーロック・バンド、Aloha のアルバム収録楽曲の歌詞の日本語対訳を行った。

平成 29 年度については、本研究では主な取材地をアメリカの音楽フェスティバルに設定しているが、近年アメリカを主とした欧米圏で開催される音楽フェスティバルの各国開催件数が増加しつつある。Tomorrowland はベルギーとアメリカ合衆国を本拠地として開催される音楽フェスティバルで世界最大規模のもので、今年度初めてアジアで開催された。主として欧米圏で活動している出演者が多数を占めている。大規模な音楽フェスティバルでは、メジャー系アクトのステージとアンダーグラウンド(インディー)系アクトのステージを明確に弁別する傾向があり、その現状を本研究のテーマであるインディー音楽との関わりの観点から分析するために、開催された7月に現地での取材を行う予定であったが、渡航後に台風のため本フェスティバルが中止となった。そのため、本フェスティバルと同種のオーディエンスが来場することが予想されるクラブ2カ所(Lamp Disco、Muse)での取材を代替的に行った。

3月にはテキサス州オースティンで例年3月に開催される South by Southwest(SXSW)での取材を行った。本フェスティバルは2週間と長期にわたって開催される、音楽、映画、アート、テクノロジー、ゲームなど多様なテーマ性をもつインタラクティブフェスティバルと一般的に認識されており、音楽の分野

では特にインディーロックを中心としたライブプログラムが多数組まれる傾向がある。また、Steve Albini (バンド Nirvana のプロデューサー) といった過去のインディーロックシーンの重要人物や、Superchunk や Wye Oak など現在人気のインディーロック・アーティストなどへの直接的間接的取材を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

石崎一樹、*Little Windows Cut Right Through*、Some Echoes、2016、12

石崎一樹、クールなインディー---アメリカのポピュラー音楽の現在(『変容するアメリカの今』所収) 大阪教育図書、2015、14

〔その他〕

インディー音楽に対する意見聴取とサンプル収集のための Soundcloud のページ
(<https://soundcloud.com/zacky1016>)

6. 研究組織

(1)研究代表者

石崎 一樹 (ISHIZAKI, Kazuki)
奈良大学・教養部・教授
研究者番号：70330751

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

斉藤 悠哉 (SAITO, Yuya)
Some Echoes(株)代表取締役